Ⅰ．平成10年度事業概要

1　全体概要

平成10年度に実施した発掘調査は、範囲確認調査のほかに、本調査として17遺跡について行った。調査総面積は74,300㎡である。地域的には豊田市をはじめとして10市町にのぼった。

報告書の作成については、原稿作成を『毛受遺跡』をはじめとして、９遺跡７冊についておこなった。印刷・製本は、『ＮＡ335号古窯跡群』をはじめとして、５遺跡５冊についておこなった。報告書に向けての整理は『朝日遺跡』についておこなった。

調査の地域的特徴を見てみると、前年度に続いて豊田市域を中心とする三河地域が面積で約７割を占めた。この中心は第二東海自動車道に関連するものである。調査課の体制は42名で、前年度に比べ５名の増である。管理課は８名であり、センター全体では職員50名の体制であった。

2　発掘調査

調査を実施した遺跡のうち、特に注目される遺物として、伝法寺野田遺跡の水田から出土した銅鏃（１点）があげられる。銅鏃が出土した水田の時期は^{14}C の測定結果からも裏づけられたが弥生時代中期を下限とするものであり、銅鏃が東海地方最古のものであるということが判明した。銅鏃は類例の少ない無茎のものであることや時期的に弥生時代中期に遡る点など、今後詳細な検討を加える予定である。また今回検出された水田は、弥生時代の当地域の生業を明らかにする貴重な資料である。

（１）旧石器時代～縄文時代

上品野遺跡では、昨年度の調査で台形様石器が出土し、瀬戸地域の歴史を大きく遡らせた。本年も隣接する東側の調査区からナイフ形石器１点・石刃・剥片が出土した。また、石器が集中する範囲の東限が確定した。八王子遺跡では、縄文時代早期に遡る土器の他、石製品も出土している。縄文時代のものとしては、これらのほか川原遺跡・今町遺跡などでも若干の遺物が出土し、今町遺跡では後期前葉とみられる住居跡が検出された。

（２）弥生時代～古墳時代

川原遺跡では昨年度に引き続く調査で、弥生時代中期の住居跡群が300棟（累計）ほど検出された。それらはこの地域が墓域として利用されたあとに居住域として利用されたもので、両者の先後関係が明瞭になった。志賀公園遺跡では、５世紀前後と見られる帆立貝形前方後円墳が検出された。これは庄内川中流域左岸で初めての前方後円墳である。周辺からは円墳も見つかっており、本古墳を中心とした古墳群の展開が想定される。本川遺跡では約70棟の竪穴住居が検出された。中でも５世紀前葉から中葉と考えられる住居跡の二例からは、住居内東壁中央付近に竈が検出された。これは竈の導入期における好資料となった。また、このほかにも柱や梁が生焼けで残った焼失住居も見られ、古墳時代住居の構造を知る上で貴重な資料となった。

（３）古代

この時期に属する遺構・遺物は、多数の遺跡で確認されている。郷上遺跡では奈良時代に属す竪穴住居

が10棟ほど検出された。水入遺跡では、B区下面で矢作川の下位段丘である篭川面に立地する集落の展開が見られる。また、D区では竪穴住居跡が60棟以上確認された。今町遺跡では4棟の竪穴住居が検出され、そのうち3棟は竈跡が見られた。天神前遺跡では土抗中から「牛養」の墨書のある須恵器が見つかっている。以上の豊田地区の他、名古屋市の志賀公園遺跡では古代の旧流路から木簡が見つかっている。釈文についてはこれから検討を加える予定であり、時期・内容ともに今後慎重に検討していく予定である。

（4）中世から近世

水入遺跡では、鎌倉期と見られる墓域が検出され、青磁椀の埋納例も見られ、三河地域における当該期の墓制を知る上での貴重な資料となった。さらに、戦国期と推定される堤状遺構も検出されたが、調査が継続する次年度にさらに全体像が明らかになることを期待したい。瀬戸市の鴬窯は古瀬戸後期の窯である。調査区域は物原であり大量の遺物が出土している。同じ瀬戸市の八王子遺跡では古瀬戸中期から後期にかけての遺物が出土した。

今町遺跡では、検出された箱堀状の溝や周辺地域の地名などから「館」跡の可能性が考えられる空間が存在する。しかし、調査区が限られた平面形をしているため、全体像が掴みにくいのが残念である。郷上遺跡では戦国期から近世にかけての屋敷地が検出され、その規模や屋敷地内の空間の利用の様子が明らかになりつつある。

今年度は城の調査が2例おこなわれた。そのうち、岩作城は過去に一部が調査されているが、今回の調査では城の北辺に位置する土塁・外堀などの遺構が検出され、岩作城の解明に新たな資料を提供した。能見城は東加茂地区で2例目の発掘調査であり、本丸・物見櫓・曲輪などが確認され、当該地方の戦国期の資料として貴重なものとなった。

3　調査報告書作成・調査研究

昨年度に原稿を作成した5遺跡の報告書を8月に、『年報平成10年度』・『埋蔵文化財情報14平成9年度』を3月に刊行した。また、次の9遺跡についての報告書の原稿を作成した。『毛受遺跡』をはじめとして、『馬引横手遺跡』『門間沼遺跡』『三ツ井遺跡』『細口下1号窯・鴻ノ巣古窯・高針原1号窯（以上合本）』『森岡第1号窯跡群』『大脇城遺跡』である。このほか、『年報平成10年度』には調査研究員の積極的な取り組みにより、調査研究編として8本の論文を載せることができた。今後とも意欲的な取り組みにより、質の高い論文の掲載を目指していきたい。

4　普及・啓発活動

発掘調査技術等研修会は、県内市町村の埋蔵文化財担当者を対象とし、研修会（Ⅰ）・（Ⅱ）の2回、各1日ずつ実施した。研修会（Ⅰ）では、「埋蔵文化財行政の変換点」をはじめとする3つの講義のあと、「遺物整理の実際」のテーマでセンター内の見学をおこなった。研修会（Ⅱ）では、『発掘調査報告書の作成』をテーマとしておこなった。奈良国立文化財研究所の金子裕之・井上直夫両先生の講義の他、3本の事例発表をおこなった。会の持ち方としては、例年2日ずつおこなっていたこの研修会

について、本年度内容の見直しをはかり、項目を精選し、受講しやすい日程とした。会後のアンケートの結果では、両研修会とも１日としたことは大変好評であったが、その分当日の日程がきつくなったという感想があり、今後さらに内容の検討をはかっていく予定である。

広報紙・誌の発行として、「埋蔵文化財愛知」を年間で４回発行した。

現地説明会は、７月に志賀公園遺跡で帆立貝形前方後円墳を中心としておこなったものをはじめとして、８月には郷上遺跡で戦国時代の屋敷地を中心として、また能見城跡では能見城の縄張りを中心としておこなった。10月には本川遺跡で古墳時代中期集落を中心としておこなった。３月には豊田地区での遺跡について、豊田市教委と合同で発掘調査成果報告会を開き、あわせて水入遺跡の現地説明会をおこなった。

埋蔵文化財展は、愛知県教育委員会ならびに東海市教育委員会の共催を得て、８月１日～８月16日の期間、東海市立文化センターで『新出土品速報展98』をテーマに開催した。本センターと、共催である東海市の遺物を併せて展示した。期間中の８月８日には、埋蔵文化財講演会を開催した。日本福祉大学副学長福岡猛志教授により『文献から見た尾張連のイメージ』というテーマで、このあとに予定されたパネルディスカッションに向けて基調講演をしていただいた。パネルディスカッションでは、福岡教授の他に５名の方々に参加していただき、その詳細は本書に掲載されているので、ご一読願いたい。

埋蔵文化財展の期間中、２回にわたり、本センターと東海市による遺跡調査結果の紹介をおこなう埋蔵文化財講座がおこなわれた。「川原遺跡」をはじめとして「大木之本遺跡」など６遺跡の紹介がおこなわれた。いずれの発表においても多数聴講いただき、活発な質疑がおこなわれた。

5　センター14年の歩み

昭和60年度に発足した当センターは、平成11年度から、『財団法人愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センター』に衣替えすることとなった。この14年間におこなった発掘調査は約93万㎡の面積に及んだ。刊行した発掘調査報告書は79集を数え、現在も次年度に７集の刊行を控えている。

この間、多数の皆様方からご指導ご協力をいただき、心から感謝申し上げますとともに、引き続いてのご支援をあわせてお願い申し上げます。　（鷲野　勉）